

世界レベルで見て北大に優位性のある研究テーマ

区分	継続【番号：11G-1】※	提案部局等	文学研究科
担当者	大沼 進		連絡先 4 1 5 8
1. 研究テーマ (必須で50字以内程度、対象となる範囲がある程度広いものでも可)			
心の社会性に関する実験社会科学研究			
2. 関連する科研費の細目番号 (3つ以内)			
3901(社会心理学)、1107(融合社会脳科学)、1009(認知科学)、			
3. 簡単な説明 (80字以内程度)			
心は集団環境における適応課題を解く道具群から成るシステムであるという観点から、心の設計を進化ゲームモデルと行動・生理・脳計測実験により明らかにし、社会科学の基盤となる人間像を提供する。			
4. エビデンスの概要 (前回平成22年度申請から今回申請までの約2年間について、箇条書きで5項目以内、1項目40字以内程度)			
<ul style="list-style-type: none"> ・国際学会基調講演・招待講演(6件)、国際学術誌編集委員(6件) ・グローバルCOE ・最先端研究基盤事業の連携拠点 ・人文社会系拠点として著しい研究成果の国際発信とインパクト ・大型研究費の獲得 			
5. 関係する部局や組織など(複数記載可)			
教育学研究院、経済学研究科、法学研究科			
6. 主たる研究者10名以内 (関係部局等が明確で、且つ対象者が多いなどの理由で記入困難な場合は空白でも可)			
氏名	所属		役職
亀田 達也	文学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		社会科学実験研究センター長
仲 真紀子	文学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		
結城 雅樹	文学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		
高橋 伸幸	文学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		
大沼 進	文学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		
高橋 泰城	文学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		
河西 哲子	教育学研究院(社会科学実験研究センター兼務)		
肥前 洋一	経済学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		
長谷川 晃	法学研究科(社会科学実験研究センター兼務)		

※区分欄の番号については <http://mm.general.hokudai.ac.jp/information/565.html> でご確認願います。

7. 状況説明 (前回平成 22 年度申請から今回申請までの約 2 年間の活動に重点を置いて、1,000 字以内)

本プログラムは、社会科学実験研究センターをその活動の基盤としながら、「心の社会性」をテーマに社会科学実験という研究手法を用いることによって、21 世紀の社会科学の堅固な基盤となり得る人間像を構築しようとするものである。

ヒトは、アリやハチなどの社会性昆虫と並んで、集団に依拠することで大規模な成功を収めてきた生物種である。本研究グループは、ヒトの心とは、集団という社会生態学的環境に適応するための装置であり、集団環境において繰り返し現れる問題群（“適応問題”）を解くために特化した道具が束になった適応システムだと考えている。こうしたパースペクティブに基づき、本グループは、心のアーキテクチャについて、進化ゲーム理論に基づくモデル構築と、行動・生理・脳機能計測実験を組み合わせる研究プログラムを組織的に展開している。実時間のみならず、歴史時間・進化時間における適応合理性を重視するこうした人間観は、経済学の前提となってきたホモエコノミカス像（実時間における合理性のみに注目する人間像）に替わって、21 世紀の社会科学の基礎となり得る新しい人間像を提供するだろうとわれわれは考えている。

21 世紀 COE（平成 14-18 年度）とグローバル COE（平成 19-23 年度）の活動を通じて、本グループを支える社会科学実験センターは、先端研究拠点として、国内外ですでに高い評価を獲得している。社会科学実験研究センターは、科学研究費特定領域研究「実験社会科学—実験が切り開く 21 世紀の社会科学—」の中核組織として（8 つの計画班のうち 3 つが北大の研究者を班長とする）、平成 22・23 年度も引き続き国際的な先端研究を行っている。

さらに、平成 22 年 6 月、文部科学省は世界水準の研究拠点到集中的に資源投下するため、最先端研究基盤事業の補助対象事業として、「心の先端研究のための連携拠点（WISH: Web for the Integrated Studies of the Human Mind）構築」（以下 WISH）など 14 件を選定した。社会科学実験研究センターは、社会科学実験を行う連携拠点として WISH の重要な一翼を担っている。北海道大学において最先端研究基盤事業の連携拠点として採択されたのは、「社会科学実験研究センター」と、「人獣共通感染症リサーチセンター」の 2 施設のみである。加えて、社会科学実験研究センターは、人文・社会科学研究推進事業「意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による『正義』の行動的・神経的基盤の解明」（亀田代表）や新学術領域研究「法と人間科学」（仲代表）などの戦略的大型研究資金のためのプラットフォームとなっている。

こうした経緯をふまえ、本学では 2012 年度から 5 年間社会科学実験研究センターの更新が措置された。この更新にかかる評価に際し、創成研究機構で委員長をはじめ本学外の外部委員が過半数を占める評価委員会が招集された。その結果、「本センターは広い領域の社会、人文科学を融合し、人間の社会、経済、文化と心に迫る新しいパラダイムを追求し、設置期限内における 4 つの達成計画全てにわたり、それぞれ注目すべき成果が得られている。まだ予備的な結果もあり、個人を対象とする実験の成果を集団の行動や特性に結びつけるには、いま一段の飛躍が必要であるが、今後の研究によりすばらしい成果が出ると期待される。」とのコメントの上、最高の S 評価が得られている。

8. エビデンスの概要に挙げた項目の説明

(1, 000字以内で具体的に記載) (グローバルCOE、共同研究拠点としての採択は説明しなくてもよい)

(a) 国際学会基調講演・招待講演 (6件)

Contract Governance Conference (Humboldt University, Berlin), 13th Society of Personality and Social Psychology, Dynamical Systems and Computational Modeling in Social Psychology Preconference (San Diego, CA), 5th Japanese-French Frontiers of Science Symposium (Tokyo), East Asian Conference on Philosophy of Law (Tokyo), Annual Meeting of Society of Experimental Social Psychology (Washington, D.C.), 13th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Symposium on Bridging Intellectual Cultures (San Diego, CA)

(b) 国際学術誌編集委員 (6件)

Evolution and Human Behavior, Group Processes and Intergroup Relations, Journal of Behavioral Decision Making, Social Psychology Quarterly, Frontiers in Cultural Psychology, Asian Journal of Social Psychology

(c) 人文社会系拠点として高い研究成果の国際発信とインパクト

・ 英文論文 59本

2010年: 38本 *Psychological Review* (IF:7.75), *Psychological Science* (IF:4.43), *Social Cognitive and Affective Neuroscience* (IF:6.12), *Current Anthropology* (IF:2.23)など

2011年: 21本 *Neuroimage* (IF:5.89), *PLoS ONE* (IF:4.41), *Personality and Social Psychology Bulletin* (IF:2.21), *Journal of Theoretical Biology* (IF:2.20)など

・ 英文著書 9件

2010年: 8件 *Social cognition, social identity, and intergroup relations: Taylor & Francis. Psychology of Gambling: Nova Publishing.* など

2011年: 1件 *New directions in close relationships: Integrating across disciplines and theoretical approaches: American Psychological Association.*

・ 論文の国際被引用数 (2010年: 294件, 2011年: 303件)

(d) 大型研究費の獲得

亀田達也。(2007~2012). 特定領域研究・実験社会科学「集団行動と社会規範」(総額: 55,200千円)

2010年度: 10,300千円 (直接経費: 10,300千円)

2011年度: 10,300千円 (直接経費: 10,300千円)

肥前洋一。(2007~2012). 特定領域研究・実験社会科学「政治制度の選択と機能分析」(総額: 31,900千円)

2010年度: 6,000千円 (直接経費: 6,000千円)

2011年度: 6,300千円 (直接経費: 6,300千円)

亀田達也。(2009~2013). 意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による「正義」の行動的・神経的基盤の解明。日本学術振興会受託研究異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業。(総額: 17,070千円)

2010年度: 3,700千円 (直接経費: 3,700千円)

2011年度: 3,600千円 (直接経費: 3,600千円)

仲真紀子。(2011~2015). 新学術領域研究(研究領域提案型)。子どもへの司法面接: 面接法の改善その評価 (総額: 30,420千円)

2011年度: 17,420千円 (直接経費: 13,400千円, 間接経費: 4,020千円)

仲真紀子。(2011~2015). 新学術領域研究(研究領域提案型)。法と人間科学。(総額: 38,220千円)

(2011年度: 21,320千円 (直接経費: 16,400千円, 間接経費: 4,920千円))

仲真紀子。(2008~2012). 受託研究(独)科学技術振興機構 司法面接法の開発と訓練(総額: 90,361,700円)

2010年度: 22,100,000円

2011年度: 25,533,300円(2010-2012年度まで 47,633千円)

※参考となる資料を添付願います。

9. 研究遂行上の主な財源、課題名及び研究期間等

人文・社会科学研究推進事業『意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による「正義」の行動的・神経的基盤の解明』平成 21-25 年度

科学研究費補助金新学術領域『法と人間科学』平成 23-27 年度

科学研究費補助金新学術領域『ネアンデルタールとサピエンスの交代劇：学習能力の進化に基づく実証研究』平成 23-24 年度

科学研究費補助金新学術領域『精神機能の自己制御理解に基づく思春期の人間形成支援学』平成 23-27 年度

10. 研究遂行上使用する主な設備名、購入年度及び購入金額(50、000 千円以上)

集団実験室、国際ネットワーク実験室、感覚システム実験室・

実験室改修補修工事費(平成 20 年度：1,756 千円、平成 22 年度：2,600 千円)

実験参加者リクルートシステム・

システム改修費(平成 21 年度：5,198 千円、平成 22 年度：1,606 千円)